カラテガール　*FIRECRACKER*

１９８１年アメリカ映画
製作・監督＝シリオ・Ｈ・サンチャゴ
出演＝ジリアン・ケスナー／ダービー・ヒントン

これも、「セブンエンジェルズ」と同様、ビデオデッキを購入したばかりの時期に借りて、脳天を直撃されたような思いを感じた映画です。

舞台は東南アジアの首都。はっきりと国名は明かされませんが、見るからにフィリピンでしょう。監督のシリオ・H・サンチャゴは一九三六年のマニラ生まれ。七〇年代にブラック・エクスプロイテーション映画と呼ばれた、黒人俳優主演のB級映画（その代表格が、最近、タランティーノの映画で復活したパム・グリアです）を作っていましたが、やがて、アメリカの資本で、フィリピンやインドネシアでのオールロケでゲテモノ映画を数多く作りました。

なぜ、アジアでロケをするかというと、エキストラの人件費、スタジオや機材のレンタル料が安くすむからです。ただし、主役級の俳優は白人。ある程度、広がりをもった市場を相手にするときは、主役は白人か中国人でなければならない。白人が主役だと欧米や日本で売れますし、中国人だったら世界中にちらばる華僑を相手にできる。東南アジアだけでは市場が狭すぎるんですね。

というわけで、この映画の主役は金髪の白人美女です。東南アジアで行方不明となった姉を探してはるばるアメリカからやってきた空手美女スーザン。

冒頭、泊まったホテルでシャワーを浴びているさなかに、二人組の泥棒が侵入。鍵くらいかけとけよ、とツッコミを入れたくもなりますが、あるいは東南アジアでは泥棒がフロントがつるんでいるという一種の差別的設定かもしれません。

旅塵を洗い落としさっぱりしてシャワールームから出てきた、パンティとブラだけのスーザン、部屋を物色中の泥棒と鉢合わせ。しかし慌てず騒がず、とびかかってきた泥棒のみぞおちに正拳突き！　回し蹴り！　背後から襲ってきたもう一人は、バックキックで股間に一撃！　立ち直って襲いかかる泥棒の一人に回し蹴りを浴びせ、そいつは壁に頭をぶつけて失神。残る一人の急所を蹴り上げ、窓から外に放り出してしまいます。

設定は無理もあるし差別的でもあるけれど、金髪美女が長い生脚を振り回して、こきたない髭面の泥棒たちをなぎ倒すのは、やはりいいものですね。二度も、金蹴りを見せてくれるのも私的には大満足。

スーザン演じるジリアン・ケスナーは、美人度はいまひとつですけど、スタイルはなかなかいい。一九五〇年生まれといいますから、このとき三一歳ですか。『デッドフォース』（一九八二年、英語タイトルはRow Force）という映画で、ゾンビの群れる孤島に漂着した空手家の役を演じ、海賊やゾンビたち相手に大暴れ、金蹴りも二度ほど見せてくれています。空手技は一応使えますが、スピードがなく、迫力はいまひとつ。

私は、ある国の国民性は、B級映画にこそ現れると思っています。すなわち、A級映画ほど、口うるさい批評家や、差別差別と言い立てる政治団体の視線を気にせずにすむ。要するに、観客に欲望にどれだけストレートに訴えられるかが勝負になる。

この『カラテガール』も同様です。まずは粗筋を追いましょう。

姉の行方を追って街中を捜し回り、その都度暴漢に襲われては撃退していたスーザンは、チャック（ダービー・ヒントン）という白人の空手家に出会います。このチャック、金のためにアングラ空手マッチにたびたび出場している男。相手を殺すまで戦うという、金持ち相手のやばい見せ物のスター格闘家です。こんな見せ物が平然と存在するのも、やはり舞台が東南アジアだからですね。欧米と違って、ここには「人権、人権」とうるさい活動家も団体もいない。ただし、イベントを主催しているのは白人のマフィアのボス、イベントのスターは白人、血をみて興奮する観客も白人、殺されるのはアジア人。白人どもがアジアを舞台に好き勝手にやりたい放題やっているという、植民地主義的な設定です。

スーザンは、姉を探すためにあえて、マフィアのボスに近づきます。そのボスから「相手を殺さなければ、なんの意味もないよ」とニタリとして言われ、反発するスーザン。ところが、その帰り道、またも二人組の暴漢に追われ、なんとかあしらいながら逃げるうちに、ドレスは裂け、ハイヒールは動きにくいから脱ぎ捨て、最後はパンティ一枚になり、二人とも殺してしまう。

その夜、人を殺すことの快楽に目覚め、その興奮のさめぬまま、スーザンはチャックのアパートを訪れ、熱いセックスに耽ります。スーザンもまた、マフィアのボスや、チャックら、アジアの深部にのめりこむことで、倫理観を喪失した白人の仲間入りをするわけです。

最初に、この映画の舞台がフィリピンを思わせる東南アジアになったのは、コストが安くつくというB級映画には必須の要請からきたものだと述べました。しかしながら、B級映画といえども、ストーリーにはある種のモチーフというか、テーマが必要です。

そう。この映画のテーマは、「東南アジアに迷い込んだ白人が、禁断の快楽を覚えていく」ことなんです。

当時、フランシス・コッポラの『地獄の黙示録』が世界中で話題になりました。粗筋は省略しますけど、要するに、文明人であるアメリカ人が、ベトナムという野蛮な場所での戦争を経験することによって、文明人としての倫理観をはぎ取られ、野蛮人の仲間入りをしていく過程を描いた映画です。

アジアとは、欧米人にとっては、価値観の一八〇度違う得体のしれない蛮地なんです。しかし、欧米人のような倫理観を持ち合わせていないぶん、自然のままの純粋なパワーを持っている。そういう連中が巣くっている場所に欧米人が入りこんだらどうなるか。汝殺すなかれ、というモーゼ以来のキリスト教文明の道徳観を喪失し、殺しやセックスの快楽に罪悪感なしに溺れていくわけです。

アジア人からみれば、なんの根拠もない偏見です。アジア人はアジア人なりの、キリスト教文明とは多少は違うけれども、固有のモラルや生活における規律は持ち合わせているわけですから。この手の偏見は、さすがに最近では情報の発達でなくなっただろうなと思っていたら、今年公開の『パールハーバー』の奇怪かつ滑稽な山本五十六以下日本海軍の描写を見ると、なかなか根強いものがありそうです。

さて、姉を殺した犯人が、実は愛するチャックだと知ったスーザン。当然、映画の結末は、二人の一騎討ちです。マットの上で道着姿で戦う設定は、露出度が物足りないけど、それは、まあいい。

このチャック、強い、強い。スーザンの繰り出す技をことごとく跳ね返し、マットに叩きつけられます。傷ついた部分を抱えて呻くスーザンは、まさにサド心をくすぐるものがありますが、ここで重要なのは、スーザンがチャックには、格闘の技量では逆立ちしてもかなわないという点でしょうね。

スーザンはこの映画で、多くの男どもを叩きのめします。しかしながら、その相手はみな、フィリピン人。予算の都合でオールフィリピンロケなのだから、エキストラがフィリピン人なのは当然なんですが、大勢のフィリピン人が束になっても負けないスーザンが、一人の白人男性にはとうていかなわない。

そもそも、スーザンは初めて人を殺した夜、チャックと寝ている。仁王立ちになったチャックの足元にひざまずき、股間に奉仕する彼女の姿は、服従そのものです。

白人女性は有色人種よりも強い。だが白人男性はその白人女性よりも強い。で、白人女性は決して有色人種とは寝ない。白人男性は当然のごとく、白人女性から体を捧げされる。この世界観は、実は世界における優位性を失って怯えている白人男性には、おおいにアピールするでしょうね。

とはいえ、このままスーザンが負けてしまっては、おさまりがつかない。そこで一発逆転。もちろん、金玉です。

棒による股間への一撃で形勢逆転。股間を抑えてマットに悶絶するチャックの両眼に、棒をズブリ！　みごとスーザンは姉の仇を打ったけれど、それは同時に愛する男を失うことでもあった。複雑な表情で立ち去るスーザン……。ちゃんちゃん。